

### 1.3. ウィーン便り (3) —— 国際原子力機関 (IAEA) に勤めて：日常生活編 (2001.5) ——

前回まで職場編として「公」の面について書いたので、今回からは「私」的な生活の面について書く。まず日常生活編。

オーストリアはカトリックの国である。第二次大戦中はナチスドイツに併合された歴史をもつが、プロテスタント発祥のドイツとは宗教的には相容れない両国ではないかと思う。ナチスへの抵抗運動も強く、ウィーンのシンボル・ステファンス教会の正面壁に密やかに刻まれている数字 05 が知られている。愛国者間の暗号で国名オーストリアを意味する。国名の頭文字は O (オー) ウムラウトである。これをウムラウト記号なしで綴る時は OE (オーイー) と書く。O (オー) を数字の 0 (ゼロ)、E をアルファベット上の順序である 5 で示して OE を 05 と表記したらしい。



ウィーンの街のことを書き始めたら紙面が足りない。ガイドブックではないので詳細はそちらに譲り、ここでは住人としての目で感じたことを書きたい。

(ウィーンのシンボル、ステファンス教会)

#### ・英語、交通、安全

職場編でも触れたが、国連招致のためにウィーン市は三つの旗印を掲げたと言う。英語の普及、交通網の整備、それに街の安全。これは実によくできている。

まず英語の普及。もちろんドイツ語しか通じないところも多いが、交通機関や美術館、博物館、インフォメーション等の公共機関は言うまでもなく、レストランや飲み屋、小売店でも英語が話せる人が誰かは居て助かる。学校教育で力を入れているし、成人向け再教育クラスもある。国連に勤める地元の人は私には英米人と区別できないほど堪能である。

次に交通。これも便利にできている。私はウィーン市の年間定期を利用しているが、これが約 3 万円余り。タクシー以外は全て共通で乗り放題。一週券、月間券もある。殆どの駅にエレベータ、エスカレータがあって、弱者に優しい。困っていると、見ず知らずの人から必ず手が伸びる。バスの乗り降りや駅の階段で乳母車の母親を赤の他人が手助けしている姿は日常茶飯である<sup>1</sup>。ウィーンの外に出るには列車か車になるが、車だと高速道路料金も年間約 7000 円のステッカー一枚で走り放題。小さな国だから可能なのかも知れない。列車なら年間約 10000 円の会費ですべての長距離運賃が半額になる。ザルツブルクへ三度往復すれば元が取れる。私のようなハイカーなどには不可欠品である。

最後に安全。まずは安心して歩ける。新聞やテレビの報道が分らない所為もあろうが、殺人・強姦・脅迫・詐欺・いじめなどの事件は少ないと言うより殆ど耳にしない (ゼロではないが)。飲み屋でボラレる話も聞かない<sup>2</sup>。

#### ・音楽とオペラ

もちろんウィーンとは切り離せない項目だが、残念ながら私にはあまり書く資格がない。嫌いではないが自分からはあまり足が向かないのだ。家内に付き合っ出てかける程度である。その中では大晦日のオペラ座

<sup>1</sup> 私が一時帰国の後空港に向かう東京山手線で、荷物が隣の乗客の足に瞬間触れた瞬間、「何だよう！」と恐い目で睨まれたのと対比して印象的である。

<sup>2</sup> 拘りや恐喝が増加していると最近の新聞で目にした。邦人の被害は幸い耳にしないが残念なことである。

公演で有名な「こうもり」を、ウィーン南の村の湖上劇場で見たこと、新春コンサートと「全く同じ曲目・楽団」のリハーサルと聞かされて見たシュトラウスが印象に残っている。美人で有名な皇后シシーを描いたミュージカル「エリザベート」だけは面白く、来奥の友人を案内して珍しく二度も見た。ウィーン少年合唱



団にも何度か出掛けた。(写真、王宮教会の最上階で歌うウィーン少年合唱団ゼンガークナーベン)

無資格者の私だが、感心するのは音楽やオペラそれに展示会の多さである。人口 170 万の都市で、これだけ演劇、音楽会、展示会が連日開かれてそのどれもが原則満席なのだ。旅行者も多いが、よくこれだけ聴衆が集まるものだと感心する。中には入場券に市内の一般交通機関が往復使える特典がついているものがある。終日有効ではないが、観劇、音楽会の前後に「お茶の一杯も」飲む時間は充分あるのが嬉しい。

#### ・キス、歩き食い、たばこ、落とし物

ウィーンの街も良いことづくめではない。ネガティブな点を幾つか。

ネガティブと言ったら苦情が出るかも知れないが抵抗を感じるのが街中での男女のキス。老若を問わず、公道、車内、劇場ホールどこでも自然に愛情を確かめている。目前でやられて目のやり場に困る。が、余りに堂々としているからか周囲の人は見て見ぬふりだ。子供も小さい頃からの習慣で別に面白い風もない。

歩きながら食べている姿もよく見る。通勤車内でサンドイッチを頬張るビジネスマンやキャリアウーマン、昼日中ピザをばくつく若者、夏にはこれにアイスクリームが加わる。老若男女を問わず大きな舌をペロペロ。

「いい年をして」とか「若い女が」等というのは野暮なのだろう。たばこの投げ捨ても多い。しかも火を消さない。男も女もだ。石造りの街だから火災の恐れがないのかもしれないが、感心できる話ではない。

最後は落とし物。情緒ある観光馬車フィアカーはウィーンの街の名物。歴史があつて営業も厳しい許可制のこの観光馬車。難点は馬の落とし物。シーズンになると街中はこれで溢れる。袋をつけて自己回収の努力もしているが万全ではない。落とし物を効率的に収集するための専用ロボット自動車を開発しようと市はかなり投資したようだがついに断念したと聞いた。

#### ・ウィーン料理（食べ物と飲み物）

私なりの採点では、食べ物が 20 点で飲み物が 80 点。こちらの趣向もあるから独断はいけませんが、一般に野菜が少なく肉は大味だ。名物のウィーナーシュニッツェルも醤油でならもっと美味しいのに。魚に至っては何でも油で揚げてしまう。焼き魚にして大根おろしを添えてくれれば、と思ってしまう。そんなわけで週に一度は中華、和食のレストランで口直しをする。ウィーン料理の中ではスープが美味しい。また、ザッハトルテに代表される甘味のケーキが傑作品らしい。「らしい」と言うのは、レパートリ外のため自分でその良し悪しが判断できないのである。

これに対して飲み物には満足している。つまりワインである。ウィーン名物に「ホイリゲ」がある。元来の語意は「今年の」ワインつまり新酒を出す飲み屋である。が、もちろん年中営業している。本来ホイリゲは「自家製の新酒」を出す飲み屋で、厳しい営業認可制らしい。曰く：(1) 自家製ワイン、(2) ぶどう畑は 500 ไร่以内、(3) 食べ物は売らない、等々。この最後は説明が要る。元来は本当にワインだけを売り、客は肴を持参する習わしだったらしい。近代化の中で食べ物も販売するようになったが、ワインはテーブルに

運ぶけれど食べ物は客自身が店内の専用カウンターで買って自席へ運ぶ店が今でも多い。着任直後それを知らずに独りで入った店で、つまみがいつまで待っても来ず閉口した。

日本では知名度の低いオーストリアワインだが結構美味しい。自宅近くの裏山に出ると、ぶどう畑が広がる。絵になる風景である。ベートーベンが交響曲「田園」の構想を得たという小路も近い。「同じ道を歩いて、楽聖は名曲を作り、凡人はワインを考える」と嘆息する。ウィーン近郊では北の白、南の赤が人気である。自宅の私は近隣農家からの産直赤ワインを常用している。夜、ワインを傾けて、独りで演歌にしびれている。(写真、ホイリゲは新酒ワインの専門店、来喫の日立マンと自宅近くの行きつけの店へ)



#### ・住宅

外国生活の楽しみに住環境の良さがある。広くて機能的で、と言うのが一般的印象だろう。私もその気持で探した。長期の海外生活は最後だから贅沢になって見るか、ウィーンらしい家とか、時には人も招待できるようなとか、と考えた。しかし結局は平凡な処に落ちついた。市の北東部は在留邦人の多くが住む地区で私もその一角のドナウ河沿いに住むことになった。ジョギングに便利だし、手ごろなハイキングコースやワインの飲み屋街にも近い。「裏山」に相当する丘カーレンベルクはいわゆるウィーンの森の東端で、ウィーン市全貌を見おろせる格好の場所である。夜景も美しく、来喫の知人をしばしば案内する。この夜景は定型の観光コースからははずれているので、「住んでいる知人がいるからこそ」と喜んでもらった。

東に向かって次第に高度を下げて来たヨーロッパアルプスもこのカーレンベルクを最後にドナウ河で終わる。その昔、暴れ河のドナウはオットマントルコの襲来からウィーンを守る自然の防壁だった。カーレンベルクの丘は川向こうを見張る格好の地だった。今のドナウには美しい橋が架かっている。丘の上から対岸に建つ国連ビル群を眺めるのは休日の心地よい散歩である。

生活費は案外かからない。ヨーロッパではスイスに次いで物価が高いと言われるオーストリアだが経済的に暮らせる社会構造だ。交通料金、飲み屋の費用も日本に比べて格段に安い。ホイリゲでは300シリング(2000円余)も払えばふんだんに飲み食いできる。遊興費は個人差が大きい。私の場合はハイキングの足代と夏の山登りに費用をかけるが、日本に比べて格安感が高い。教育費は私には実データがない。日本人職員子弟の多くは日本人学校か国際学校に通学している。地元の学校、つまりドイツ語環境に通学しない限り私立学校扱いなので日本よりは費用が嵩むだろう。

#### ・自炊生活

個人的理由だが実質単身での赴任である。最大の気懸かりは食事だった。着任前から年齢とともに和食に趣向が変わって来てもいた。結論ははっきりしていた。自活である。たまたま、赴任の一年ほど前から家内が「単身赴任」し、私は自宅で単身生活をしていた。その機会に厨房に入っていたのである。趣味で出掛ける山では何度も料理していたから自信はあった。が始めてみると山とは勝手が違っていた。レパートリーは限られていて、カレーライス・野菜炒め・ラーメン・炒めご飯の反復である。これではいかんと家内の書棚から料理本を取り出して、手探りで始めた。分らなくなると長距離電話で家内や義妹に尋ねたりもした。魚料理で指を傷付けたりして授業料も払ったが良い経験だった。

それが役立つか、ウィーンでは殆ど自炊している。自炊率でいうと朝食 100%、昼食（つまり弁当）殆ど 100%、夕食 50%か。少しはレパートリーが増えた。といっても、魚は冷凍の鯛や鱒、鯖を何とか食べている程度である。レシピにある素材がないと途端に行き詰まる。応用問題ができないのだ。サラダの味付けを聞くため日本迄電話したこともある。日本人会の「お父さん向け料理教室」に顔を出すこともある。それでも、自炊の効果は大きい。健康なのだ。技術と素材不足による粗食傾向が却って良いのかと楽観している。



（「裏山」のカーレンベルクで妻と）

有り難いのは女房である。休暇を利用して来てくれる時には、自分の体重に匹敵する位の食材を伝書鳩のようにせっせと運んでくれる。そのお陰で自活が続いたのだと感謝している。友人、知人の差し入れもありがたい。誠意が伴っているからそのどれもが嬉しいが、特に感謝しているのが納豆とごま和えのもとである。中でもごま和えのものは逸品だった。簡単な割に、日本の味が彷彿とし、野菜不足になりがちな生活なだけに特にありがたかった。食べる都度、送り主の顔を思い浮かべて味わった。

#### ・ウィーンの中の日本

ウィーンと日本間の直行便は 1996 年春に始まった。日墺間の交流が増えた象徴かも知れない。

以前に比べて和食用食材の入手が楽になったと先輩から耳にした。私が来てからも、和食レストラン特にスシバーの急増が目立つ。「日本食は健康食」との信仰がここでも広がって人気が高い。日墺協会主催のクリスマスパーティ、日本大使館のパーティでは、「にぎり寿司」屋台の前に外人の長い行列が立つ。八百屋には、柿、しいたけなどがそのままローマ字で店頭に出るようにすらなった。

芸術分野でも日本色は広がっている。2002 年の新春コンサートは小沢征爾が指揮棒を振る。「魔笛」の歌い手、「胡桃割人形」での踊り手など上演作品に登場する日本人も少なくないし見劣りしない。日本語で印刷のプログラムも珍しくない。が、まだまだ認識は高くない。「日本」を紹介する展示会がもっと開かれればと国に期待したい気持ちである。例えば、「日展」を持ってこれないかなどと考える。

大相撲への関心も見逃せない。本場所中はテレビでハイライトがあつて私より情報の豊富な知人も居る。着任直後の秋に開かれた「ウィーン場所」は大入りだった。貴乃花、曙、小錦などが国際会議場の臨設土俵で技を披露した。翌日、貴乃花を迎えての日本人職員昼食会で身近に談笑できたのは思わぬ出来事だった。

市民生活の中には漫画文化も広まっている。カラオケ店も出現。テレビではポケモンやセーラムーンがドイツ語を喋っている。

#### ・「外交官待遇」ということ

耳にしたことのある響きの良い言葉だし、自分もそれが与えられると聞いて着任した。先ず、給料に所得税がかからない。消費税は、上限下限はあるがかなり還付される。ガソリン税も原則還付される。

売店では税引きで生活用品を売っている。ただし、地元への影響を避けるためオーストリア以外の商品だけである。購入品を転売して利益を得ようとする職員がいるので、利用額には制限がある。ワイン類や保存食、日常品が中心で生鮮食料品はない。嬉しいことに米、味噌、醤油、豆腐もある。

公務での旅行には国連旅券を使う。国によっては「外交官用」ゲートがあって重宝することがある。開発途上国への公務では、地理的な要因で早朝とか深夜に空港を利用する機会が多い。そんな時に時間短縮はありがたい。ただし、税関無審査とはいかない。

車のナンバープレートには、ある程度以上の職員には特別の記号が与えられる。私ももらっている。これを持つ車で国境を越える場合、特別レーンがあって優遇される場合がある。待ち時間が少ないのは助かる。しかし、私的旅行では使えない。週末に利用しようとする、「公務ですか」ともってもらしく尋問されて正直者は苦勞する。このナンバープレートの大きな(?)利点は、むしろ日常である。高速道路や一方通行規制の街中で右往左往していると、「外交官(外国人)じゃ仕様がな」と寛容になってくれるらしい。また、駐車違反も善意ならかなり眼をつぶってくれるようだ。

#### ・EUのこと

最も身近に感ずるのはボーダレスである。つまり国境の検問が殆どなくなった。車で国境を越えるときの行列が遠い昔に思えてくる。空港での旅券審査も極めて簡略化された。近く通貨がユーロに変わる。これで両替の気苦勞がなくなる。関税も一部の商品を除いて撤廃、労働市場も大幅に自由化された。住み易くなったというのが大部分の意見だ。昨年右翼といわれるハイダーが政権に加わって反発を受け、村八分になりそうになったが最近解除方向にあり、ヨーロッパ連合の一員としてこれからもオーストリアはしたたかに生きて行くだろう。

今回は趣味生活を振り返る。